



あなたに優越感を贈りま
しょう



里美美羽

あなたに優越感を贈りましょう

「まったく、何が不満なんだか！」

またか、と言わんばかりに、私はPC画面の前でケッと舌打ちをする。

きっと今の自分の顔を誰かに隠し撮りされていたとしたら、目も当てられないに違いない、と刹那思ったが、

次の瞬間にはもう、画面を再び憎々しく見つめている自分がいた。

ところで、舌打ちをさせた対象物と私は、まったく面識がない。

だってそれは、今日たまたまネットサーフィン中に見つけたブログの管理人なのだから。

そのブログの最新記事には、こう、ある。

「一身上の都合で、このブログは本日を持ちまして閉鎖します。

長い間仲良くして下さい、ありがとうございました。」

ありきたりな美辞麗句。けれど、まるでスクープ一面を飾るかのような物々しきでその文章はふんぞり返っている。

更新した時刻を見る。すると、まだ数時間と経っていないにも関わらず、

訪問者からのコメント数は既に「56」をカウントしている。

「本当に残念です！」

「また新天地で始められる時は、ぜひアドレスを教えてください」

などなど、こちらも手垢のついた常套句がずらり、並列している。

「まったく、何が不満なんだか！」

このような場面に出くわす度、私はずっとそう毒突いて来た。

何故って？本心、彼らの選択が理解出来なかったからだ。

自分の発信した文章なり写真に、誰かからの反応が確実にあること。

また、それを通じて、人間関係を魅力的に広げてゆけること。

愉しくて仕方がないだろう？更新が、張り合いで仕方がないだろう？

それなのに、どうしてそんなに簡単に築きあげた場所を手放せる？

そんな居場所が、喉から手が出るほど欲しくて努力しているのに、でもどう頑張っても手に入らない。

そう言う人間だっているのだ。私は、心底妬ましかった。人気者である彼らが。

私は過去、新しいブログを作っては閉鎖。それを何十回となく繰り返している。

その都度、ハンドルネームを変え、サイトの雰囲気も変えた。

人気ブロガーが鼻屑にしている素材サイトのイラストを使ってみたりもした。

日記は、当たり障りのない良い人ぶった記事を意識して載せた。

人気サイトに積極的にコメントだってした。少ない訪問者には礼儀正しく接して来た。

でも、何をどう変えても、彼らのサイトのように、訪問者が私に集まることはなかったのだ。

こうして私は、他人を羨むと同時に、どんどん自分が嫌いになっていった。

ここまで、敢えてネット上での体験を挙げてみたが、この傾向は、実はネットにおいてだけではない。

私は実際の私生活でも、似たりよったりな人生を歩んできた。

スポットライトが当たった試しなんて、ただの一度だってありゃしない。

いろいろ我慢して合わせているのに、存在をどこか軽く見られがち。

むしろ人には尽くしている方。でも、なんか報われない。

そんな自分が惨めで、情けなくて、大嫌いで、いつになったらこんな人生終わるのか、毎日そう思って生きてきた。

そんなある日だった。

図書館の一角で、これまた誰からも相手にされていないような排他的雰囲気醸す1冊の本と出会ったのだ。

『こんな私が大嫌い！』中村うさぎ著。

何なのだ、この逃げ場のないストレート過ぎるタイトルは。

そのインパクトだけで、私はその本を手を取った。

どうせまた、自分の悪い面よりも良い面に意識を向けましょう、的な偽善本だろう？と思った。

が、この本には、これまでの偽善本にはなかった、

「そんなこと言っただって所詮は・・・」の続きがちゃんと書いてあったのだ。

中村うさぎは言う。「私は、自分嫌いのプロさ」と。

何を言うか！私の方がアンタよりずっと筋金入りだ！

この時、私の中で妙な競争心に火がついた。

そして、とり憑かれたように、その本を一気に読み倒した。

「自己評価」に関する件まで来たときだった。あまりの衝撃に、頭上に雷が落ちたのかと思った。

『自分嫌いの人って、本当はすごく、自分好きなんだと思うの。謙虚で厳しいように見えて、本当は誰よりも傲慢で自分を高く見積もりすぎているウヌボレ屋さんなのかも知れない。』

は？つまり、自分嫌いは、本当は自分好きってこと？

それまで黒だ、黒だと凝り固まっていた私のオセロ板が、ぺかぺかと反転し白へと変わった。

しばらく理由もなくぼかんとした。それから、裸の王様のように、急にこれまでの自分が痛恥ずかしくなった。

すると間髪入れず、本はこう続く。

『これが自分に距離を置くということ』

私は自分が好き過ぎて、期待し過ぎて、その期待とかけ離れた自分にずっと怒って、ひいてはその理想を

他人にも押し付け、期待通りに反応してくれないからと恨んで来たのか。

ああ、なんたるエネルギーの無駄使い。

そして今、この文章を読んだあなたも、なんて痛いやつなんだとやや上から苦笑いしていること
と思う。

でも、いい。それが今回の私の目的なのだ。

『優越感は快感だもの。人に快感を与えられるなんて、素敵じゃない？』

今、私は、少しだけ強くなった。